

歌川国芳筆「源頼光公館土蜘蛛作妖怪図」再考
— 妖怪の図像源泉と五雲亭貞秀作品との関わりをめぐって —

曾田めぐみ

(大阪大学大学院・日本学術振興会特別研究員〔DC1〕)

歌川国芳筆「源頼光公館土蜘蛛作妖怪図」(天保十四年〔1843〕刊)は、病床の源頼光とその四天王の背後で土蜘蛛が巣を広げ、様々な妖怪が徒党を組んで争う様が描かれた大判三枚続の錦絵である。四天王の卜部季武の装束に施された沢瀉紋が水野忠邦(1794~1851)の家紋に類することから、本作は忠邦の天保の改革を風刺したものとの憶測が広まり、「判じ絵」として江戸中の評判を呼んだ。先行研究では天保の改革批判を主題とした作品として取り上げられてきたが、本発表では風刺や判じ物という観点から一旦離れ、国芳が本作を制作する際に着想を得た先行作例について考察する。

まず、土蜘蛛が作り出した妖怪たちは天保の改革の犠牲者を表すとの説が踏襲されてきたが、国芳が妖怪を描くにあたって参考とした作品を特定する。本作が刊行された前年、天保十三年(1842)に江戸の回向院で行われた法隆寺出開帳に出陳された伎楽面を、国芳が妖怪として本作に描いたことは発表者が既に指摘した点である。これに加えて、国芳が十返舎一九の原作に勝川春英が挿絵を手掛けた合巻『化物の姫入』(文化四年〔1807〕刊)、『妖怪一年草』(文化五年〔1808〕刊)を直接の典拠として、多くの妖怪を本作に登場させている点に注目したい。

国芳が描く妖怪の多くに典拠が見出せることから、天保の改革を風刺しているという従来の解釈は再検討を要するだろう。このことに付随して、四天王の背後で左右に対峙する二つの妖怪軍にはそれぞれ「疱瘡除け」という病の予防や治癒を願うイメージと「髑髏」という死のイメージが投影されており、対立するもの同士が合戦を繰り広げる構図となっている点にも留意したい。妖怪たちの「対戦」に坂田金時と渡辺綱の囲碁「対局」のイメージも重ねられているとすれば、疱瘡絵に頻繁に描かれる金太郎すなわち坂田金時の側に「疱瘡除け」の妖怪軍が位置している点は、本作に込められた主題を読み解く上で重要となる。

次に、五雲亭貞秀筆「源頼光公妖怪屋敷」と本作の共通点について考察する。両図の特徴は、頼光の四天王が土蜘蛛の妖怪らを退治する素振りを見せていない点であり、これは他の同画題作品に見られない図様である。貞秀筆「源頼光公妖怪屋敷」は国芳筆「源頼光公館土蜘蛛作妖怪図」に先行して出版されたことから、国芳が貞秀の作品に触発されて本作を描いたものと推測される。また、国芳作品のイメージソースとなったと思われる作品を手掛けた貞秀が、本作の海賊版と目される「土蜘蛛妖怪図」を描いた点も大変興味深い。貞秀の海賊版では、原本にあたる国芳作品に対する当時の民衆たちの「判じ」が反映された、新たな妖怪が描かれている点にも注目したい。

同時代の人々が歌川国芳筆「源頼光公館土蜘蛛作妖怪図」に天保の改革の犠牲者を見出したという事実は十分に考慮すべき点であるが、作品に何がどの様に描かれているのかという基本的な事柄を見つめ直すことで、国芳が本作を制作した意図を本発表で捉え直す。